

# 文殊菩薩の信仰をめぐる

スダン・シャキヤ

(種智院大学)

## 1. はじめに

文殊菩薩あるいは文殊師利は、サンスクリット語のマンジュシュリー (Mañjuśrī) に由来する言葉である。文殊は諸文献において、妙吉祥、妙音 (Mañjuḥoṣa), アラパチャナ (Arapacana), 金剛利 (Vajratikṣṇa), 法界語自在 (Dharmadhuvāgīśvara), 文殊金剛 (Mañjuvajra) などの様々な名前で呼ばれている。この菩薩は学問・智慧を司る尊格として、観音と共に親しまれている尊格であり、地域によってその信仰にも多様性が認められる。右手で剣、左手で典籍を持っているのが文殊のオーソドックスな姿である。

日本では「三人よれば文殊の智慧」ということわざが日常会話で用いられるほどなじみ深い尊格であり、中国では山西省の五台山は文殊信仰の聖地として古くから知られている。興味深いことにネパールでは、その中国からやってきた文殊が現在のカトマンズ盆地を造ったという伝説があり、それゆえ文殊は「創造神」としても信仰されている。さらに、起源は異なるが、文殊は学問・技芸を本質とする弁財天と同一視されていることも注目に値する。<sup>(1)</sup>

8世紀後半頃インドに成立したとされている仏教タントラ『ナーマサン

ギーティ』では、文殊は頂点に置かれ、「本初仏」をはじめとする種々の名号をもって讃嘆されている。また、ネパール成立の物語集『スヴァヤンブー・プラーナ』(Svayambhūpurāṇa, 14-15CE)は『ナーマサンギーティ』と深い関わりを持ち、独自の文殊信仰が展開されている。そこで、本稿においては、『ナーマサンギーティ』(Nāmasaṅgīti)と種々の立場から著されたその諸註釈書における「文殊」の解釈とその信仰について考察する。

## 2. 大乘教典および仏教タントラに見られる文殊菩薩

文殊は後述する諸註釈書にも見られるように南インド出身で、バラモン族の实在の人物という説も広く知られている。また、文殊は阿含経や部派仏教の文献では確認することはできず、大乘仏典<sup>(2)</sup>に初めて登場する点から、文殊菩薩は純粹な大乘の菩薩とされ、古くから般若を象徴する菩薩として知られている。筆者は大乘仏教およびタントラ文献における文殊についてすでに言及しているのでそれを以下でまとめて紹介する。

まず、大乘仏典における文殊菩薩についてであるが、阿南(Ānanda)、舎利子(Śariputra)のような仏弟子らと共に登場することもあれば、眷属としての菩薩群の上首となって登場することもある。たとえば、『法華経』(Saddharmapuṇḍarikasūtra)のような初期の大乘仏典において、文殊は観世音、弥勒等の菩薩と共に眷属の一人として登場する。さらに、『維摩経』(Vimalakīrtinirdeśa)では、文殊菩薩は釈尊の十大弟子と共に登場する一方、『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経』(Saptaśatikāprajñāpāramitā)、『文殊師利般涅槃経』(Mañjuśrīparinirvāṇasūtra)等においては文殊自身が教主となって説法する。また、『仏説阿闍世王経』(Ajātaśatrusūtrarāja)において文殊は諸仏・菩薩の父母であると説き、「諸仏・菩薩を生み出す

— 48 — 文殊菩薩の信仰をめぐって (スダン・シャキヤ)

者」として解釈される。文殊を「諸仏・菩薩を生み出す者」という点は『ナーマサンギーティ』の第60偈に説かれる「一切仏達を生み出す者 (janakaḥ sarvabuddhānām)」という文殊智慧薩埵の異名と類似している。このように大乘仏典において文殊は眷属の一人→善友→仏・菩薩の父母、とその地位が次第に向上し、諸菩薩を仏道に導く者としての解釈にまで至る<sup>(3)</sup>。

次に、タントラ文献においてであるが、まず行タントラ (Caryātantra) 類を代表する『大日経』では、文殊は眷属の一人として登場し、智または煩惱を能断する般若を象徴する。瑜伽タントラを代表する『真実撰経』では眷属として登場するが、後に灌頂を授けてから「金剛利」(Vajratikṣṇa) となる。『超勝三界経』では世尊である教主に代わって「arapacana」を説く。さらに、『秘密集会』や『クリシュナヤマーリタントラ』などのような無上タントラにおいて、それぞれマンダラの中尊として Mañjuvajra や Vajrabhairava の名を持ち、合体・忿怒の姿を以て登場する。さらに、『ナーマサンギーティ』においては文殊を主尊に頂き、八百以上の異名を以てその特質を称讃する。「本初仏」はその重要な名号の一つであり、それが仏教において最も遅く成立した典籍 *Kālacakratāntra* において、その成立の典拠の一つとして扱われているのである。

すなわち、文殊の位置は大乘仏典においてすでに高位であったが、タントラ文献においても「眷属の一人→高位菩薩→マンダラの中尊→本初仏」と次第に向上して行く<sup>(5)</sup>。中でも、『ナーマサンギーティ』においては文殊を種々の名号で称讃し、頂点に置き、最終的に「本初仏」として進化させている。そこで、『ナーマサンギーティ』の主役である文殊がどのように解釈されているのかを以下で考察して行く。

### 3. 『ナーマサンギーティ』とその註釈

周知のごとく『ナーマサンギーティ』(*Nāmasaṅgīti*)は通称名であり、その中で正式な名称として知られているのは *Mañjuśrījñānasattvasya Paramārthā Nāmasaṅgīti*——智慧を本質として存在する文殊の最勝たる真実を備えた名号の称讃——である。本論においてもその通称『ナーマサンギーティ』を用いる<sup>(6)</sup>。『ナーマサンギーティ』の本文そのものは特定の思想や儀礼を説くことなく、文殊または文殊智慧薩埵を称讃する様々な名(nāman)と“名を唱えること”によって得られる功德(anuśaṃsā)<sup>(7)</sup>が主な内容となっている<sup>(8)</sup>。また、『ナーマサンギーティ』には多数の註釈書があり、それらは以下の三種に分けることができる。そのうち、本稿で用いる註釈書のみを巻末の参考において示すが、以下ではその著者を取り上げる。

(I) 瑜伽タントラ系の註釈：Mañjuśrimitra, Vilāsavajra, Mañjuśrikīrti, Smṛtijñānakīrti, Rong zom pa

(II) 無上瑜伽タントラ系の註釈：Vimalamitra, Dombiheruka

(III) *Kālacakrantra* 階梯からの註釈：Raviśrījñāna, Narendrakīrti

『ナーマサンギーティ』の註釈書に見られる文殊の解釈に先立って、『ナーマサンギーティ』そのものを諸註釈ではどのように解説しているかを見て行きたい。

### 4. 諸註釈に見られる *Nāmasaṅgīti* の理解

上述した『ナーマサンギーティ』の諸註釈の中からここでは主なもののみを取り上げる。まず、8世紀半ばごろ活躍した密教学僧 *Mañjuśrīmitra*<sup>(9)</sup>

が著した *Vṛtti* は瑜伽タントラの立場から『ナーマサンギーティ』を註釈する最も古い文献であり、現在はチベット語訳のみが存在する。そこでは Mañjuśrīmitra が『ナーマサンギーティ』を「有情のために過去、現在、<sup>(10)</sup> 未来の三時に説く至尊文殊の無始の教えである」と解釈する。また、その弟子である **Vilāsavajra** はその註釈 *NMAA*<sup>(11)</sup> で以下のように説く：

定義 (abhidhāna-) [について言えば]、『ナーマサンギーティ』というのとは [以下のような解釈である]。唱うこと (gāna) が「ギーティ」(gīti) である。正しく唱うこと (samyaggīti) が「サンギーティ」(saṃgīti) である。[そういうわけで] 種々の名号を正しく唱うことは「ナーマサンギーティ」(*Nāmasaṃgīti*) である。諸名号「ナーマ」(nāma) とは、瑜伽・所作・行の [三] タントラ・教説・経量部・アビダルマ・律・世間・出世間と、そして一切の不動・動のものであり、それらの諸名号を [唱えるのが] 称讃 (saṃgīti) である。<sup>(12)</sup>

すなわち、Vilāsavajra は種々の名号を正しく称讃することまた唱えることが「*Nāmasaṃgīti*」であると解釈している。

**Mañjuśrīkīrti** は「法界語自在流儀」を祖とし、10世紀の初めころ活躍した学僧である。彼の註釈書 *Ṭīkā* は瑜伽タントラの立場から著された最も詳細なものであり、その中で『ナーマサンギーティ』を以下のように解釈している。

一切仏の功德 (guṇa) を自性とし、名号を正しく唱えることを本質とし、清浄な法界を本性とする至尊語自在 (Bhaṭṭakara-Vāgīśvara) が述べられるものであり、彼が示す御教えの集まりが『ナーマサンギーティ』である。<sup>(13)</sup>

また、別の箇所では以下のように説く。

諸名号 (nāma) を正しく結集しているのが『ナーマサンギーティ』

である。それはまた、諸名号に利益が伴うが故に仏性を得ることになるのであり、諸仏達の功德を対象とするが故に諸文字が確実に対応していることに意味がある<sup>(14)</sup>。

つまり、Mañjuśrīkīrti によれば、『ナーマサンギーティ』は仏性を獲得するといった諸功德を具えた名号を正しく結集した<sup>(15)</sup>ものであり、それは、他ならぬ至尊語自在すなわち文殊そのものの御教えであるという。この解釈は前述した Mañjuśrīmitra のそれとも類似する。

さらに、Raviśrījñāna 著 *Ṭippanī* は *Kālacakratāntra* の立場から著された註釈書であり、そのサンスクリット校訂テキストはインドからすでに出版されている。Raviśrījñāna は「種々のタントラに説示された大樂や俱生歡喜の樂の名号による、正しい知識が『ナーマサンギーティ』である。」と説く。

以上で見てきたように、いずれの註釈者も『ナーマサンギーティ』を諸名号を唱うことまたは、諸名号の集まりとして解釈することに共通性がある。『ナーマサンギーティ』の内容構成及び上記の諸註釈者による解釈を踏まえると、文殊たる文殊智慧薩埵の特質を説示する種々の「名号」の集まりを正しく「唱う」のが『ナーマサンギーティ』であることがわかる。

## 5. 諸註釈に見られる文殊の解釈

文殊または文殊智慧薩埵を頂点におく『ナーマサンギーティ』の諸註釈がどのように解釈されているかを以下で考察していきたい。

### 5.1. Mañjuśrīmitra

まず Mañjuśrīmitra に註釈書 *Vṛtti* では

— 52 — 文殊菩薩の信仰をめぐる (スタン・シャキヤ)

「柔軟な音を有するが故に文殊である。智慧を本性とする有情であるが故に智慧薩埵 (jñānasattva) であるという。」<sup>(16)</sup>と説く。

## 5.2. Vilāsavajra

すでに述べたように Vilāsavajra は Mañjuśrimitra の弟子であり、その解釈と類似した内容が以下の Vilāsavajra の註釈書 *NMAA* にも見られる。

五智を自性とするものが世尊文殊智慧薩埵である。その者に柔軟な (mañju-), [つまり] 柔らかな (komala-) 吉祥 (śri) を伴っている。その彼が「文殊師利」“Mañjuśri”である。智慧薩埵 (jñānasattva) というのは、一切如来の心に住するからである。それが文殊であり、智慧薩埵 jñānasattva でもあるので、文殊智慧薩埵 (Mañjujñānasattva) である [というのである]。この者は、十地の主としての [大乘の] 菩薩ではなく、むしろ無二の智であって、他ならぬかの般若破羅蜜多そのものなのが、文殊智慧薩埵なのである。<sup>(17)</sup>

すなわち、*Nāmasaṃgiti* が説く文殊は一般的に知られている大乘仏教の菩薩のように悟りに向けて十段階の境地を進んでいる者ではなく、般若破羅蜜多そのものであり、すでに仏果を得た者なのである。そのため、「世尊」という称号が用いられている。また、Mañjuśrikīrti の *Ṭikā* においても文殊を「至尊」や主世尊とする称号が用いられている。

## 5.3. Smṛtijñānakīrti

Vilāsavajra の *NMAA* をチベット語に翻訳したのは Smṛtijñānakīrti であり、彼自身も『ナーマサンギーティ』の註釈書を残しており、その註釈書 *Bhāṣya* では文殊を以下のように解説する。

煩惱や強くて不快な病苦が存在していないものであるから「柔軟」である。それよりあらゆる善なる功德が生ずるために「吉祥 śri」である<sup>(18)</sup>。また、〔文殊は〕それはすなわち①本性因 (rang bshin rgyu) の文殊と、②修習道 (bhāvanāmārga; bsgom pa lam) の文殊と、③究竟の結果 (niṣṭhaphala; 'bras bu mthar thug) の文殊の三種であり、すなわちそれぞれ、①一切の束縛を有している者と、②ある部分 (pakṣa; phogs) が未だ離れていない者と、③究竟 (あらゆるもの) から離れている者である<sup>(19)</sup>。

上記の解釈によると、煩惱のような悪がなく、善き功德が伴った文殊には三種があるという。まず、本性因の文殊はあらゆる束縛を有し、煩惱にまみれている凡夫のことである。第二に、修習道の文殊は食・姪の欲からは完全に離れているものの物質より成立した世界にいるものである。第三に、究竟の結果の文殊とは欲望・物質などあらゆるものから離れて精神のみが存在しているものである。つまり、Smṛtijñānakīrti が、文殊をそれぞれ欲界・色界・無色界の三界に配置して三種の文殊を説示していると考えられる。

さらに、Smṛtijñānakīrti は *Bhāṣya* では教義に基づいて文殊を以下のように解釈している。

声聞の教義における文殊とは、自立した凡夫であり、アーリア (バラモン) の部族に属し、8あるいは16才の童子のような姿をしている。一般的な〔大〕乗の教義では、十地の菩薩の道理によって確立した〔菩薩の〕一人である。

大乘の教義ではない経典 (タントラ) によって無量の劫 (kalpa) で既に覚ったものであり、無学の階梯によって確立した一人であるがゆえに、自利として十地の菩薩の一部分を持している一人であると主張



する。所作〔タントラ〕においては、三部族の中で\*因部族の部分を持する文殊であると主張する。瑜伽〔タントラ〕においては、須弥山の上に最勝の仏王として転じた時に、西側の第二の金剛利<sup>(20)</sup>と呼ばれるのが文殊であると主張する。大瑜伽においては、法身を本性とするものを文殊であると主張する。彼は普賢とも呼ばれている<sup>(21)</sup>。

#### 5.4. 「著者不明の註釈書」

また、「著者不明の註釈書」(Annonny)では『ナーマサンギーティ』の註釈の中でも注目すべき著書であり、ここでは文殊について興味深い言及を行っている。

聖文殊は無二の智慧であり、それは十方三世の一切仏の智慧を自性とするもので、菩提心を本性とするものであり、一切法の性質と不離のものである<sup>(22)</sup>。

さらに「文殊」は別の箇所ではそれぞれの教義に基づいて以下のように説明されている。

声聞の教義では、文殊というのは菩薩の相続に属さないものであり、さらにまだ〔八〕聖道を獲得してない凡夫(prithagjan)であると主張する。共通の波羅蜜多の教義においては、菩薩は十地の主であると主張する。ジャンプ州(Jambudvīpa)においては、世尊釈迦牟尼の眷属('khor)になったものである。色究竟〔天〕では世尊毘盧遮那の弟子となったものであるという。

意味深い経典(タントラ)の教義において、前世にすでに悟ったものであり、菩薩の理趣に安住されたものである。真言理趣においては、ある〔タントラ〕において部族主であり、如来の肉髪より顕現したもので、菩薩の理趣に安住することを主張する。瑜伽の理趣のある〔タ

ントラ]では、世尊毘盧遮那の心より顕現する十六の大智慧薩埵の中の金剛利であり、文殊金剛であると主張する。大瑜伽の理趣のあるタントラにおいて、文殊智慧薩埵とも呼ばれており、菩薩金剛 (tib. byang sems dpa' rdo rje)<sup>(23)</sup>とも呼ばれている。同様に金剛薩埵や普賢と大安楽 (bde ba chen po) などが一切仏の主宰 (tib. gtsso bo) であり、一切マンダラの至尊 (mnga' bdag) そのものとしても説かれる。*Mañjuśrīmāyājāla (tantra)* においては、一切如来の胸に柔軟 (skt. mañju; 'jam pa) な金剛として住し、それはまた、本初仏の在り方と智慧薩埵の在り方で住すると主張する。これらは聖文殊の本質であることを説いたものである。<sup>(24)</sup>

文殊に対する上記の説明は前述した Smṛtijñānakīrti の註釈と類似している。すなわち、両者の共通釈として、文殊は声聞教義において、バラモン部族の8あるいは16才の童子の姿の凡夫であり、波羅蜜多の教義においては十地の主としての大乗の菩薩であるという。さらに、『大日経』のような行タントラの教義において、文殊はすでに悟った者として解釈されている。特に瑜伽タントラ (『初会金剛頂経』) において文殊は世尊毘盧遮那の心から顕現する十六大菩薩の中の金剛利 (Vajratikṣṇa) であると説かれる。また、『ナーマサンギーティ』は『幻化網タントラ』<sup>(26)</sup> という大規模な経典から抄出されたものであり、そこに文殊の異名として「本初仏」という言葉がはじめて登場する。このように「著者不明の註釈」では、文殊を声聞、波羅蜜多 (大乗) とタントラの三種のそれぞれの立場から説き、凡夫から本初仏に至る解釈の展開をまとめている。

## 5.5. Rong-zom-pa

チベット仏教 (ニンマ派) では、11世紀に活躍した **Rong-zom-pa** (ロン  
— 56 — 文殊菩薩の信仰をめぐって (スダン・シャキヤ)

ソンパ, Rong zom chos ki bzang po, 1012-1088<sup>(27)</sup>) という大学僧がいる。彼の著作は『ロンソンパ全集』*Rong zom chos bzang gi gsung 'bum* (四川民族出版社, 1995) として残されているが<sup>28</sup>, 上述した「著者不明の註釈書」(Toh 2091; Ota 3364) と Rong-zom-pa 著 *mTshan brjod 'grel pa* (以下『Rong-zom-pa 註』<sup>(28)</sup>) は同じ内容であることを確認した。それゆえ, 『チベット大蔵経』(蔵内) に収録されているこの「著者不明の註釈書」は Rong-zom-pa の著作であると考えるのが妥当であろう。

*The Nyingma School of Tibetan Buddhism* によれば, Rong-zom-pa は晩年にチベットに仏教を広めに来た Smṛtijñānakīrti の「化身」といわれ, Smṛtijñānakīrti の死後すぐにその後継ぎとしてチベットに密教を広めたといわれている<sup>(29)</sup>。よって, 『Rong-zom-pa 註』の文殊に関する解釈が Smṛtijñānakīrti 釈と類似することもうなずくことができると考える。

## 5.6. Vimalamitra

無上瑜伽タントラの立場から著されている Vimalamitra 註釈書 *Dīpa* では文殊について以下のように説いている。

文殊 mañjuśrī には五種ある。すなわち, ①本性因 (rang bzhin rgyu) と, ②修習道 (bhāvanamārga; bsgom pa lam) の文殊と, ③究竟の結果 (niṣṭhaphala; 'bras bu mthar thug) の文殊と, ④教化されるべきものから浄化されたものとして顕現する (gdul bya las dag pa la snang ba) 文殊と, ⑤相を本性として顕現する文殊である<sup>(30)</sup>。

ここでは五種の文殊が説かれているが, 最初の三種の文殊——①本性因, ②修習道の文殊, ③究竟の結果——は上述した Smṛtijñānakīrti の引用であり, 残りの二種の文殊は Vimalamitra 独自の註釈である。

## 5.7. Dombiheruka

同じく、無上瑜伽タントラの立場から著されている Dombiheruka の註釈書 *D-vṛtti* では文殊は「福・智の二資糧を円満したものである」と解釈され、さらに以下のような字義釈をしている。

文殊とは不二の方便と般若の福・智の〔二〕資糧を円満したものである。Ma とは無分別の般若である。Na とは不二の安楽 (sukha) である。Ja とは生類に対して悲を自性とするものである。U とは方便 (upāya) を正しく伴ったものである。Śrī とは福德・智慧の〔二〕資糧を円満したものであるが故に不生の法を有する一切の文殊は大いなる我性である。<sup>(31)</sup>

## 5.8. Raviśrījñāna

最後に、*Kālacakratantra* の立場から著された Raviśrījñāna の註釈 *Ṭippanī* では、文殊を以下のように解釈している。

文殊智慧薩埵というのは、法性を象徴する柔軟な (*mañju-*) の言葉によって金剛の頂に広まった最勝の蓮華であり、それこそが無二の智慧の依り所であるから「吉祥」(śrī) である。それより出現する無二の智慧は「文殊智慧薩埵」である。<sup>(32)</sup>

すなわち、文殊とは法性を象徴する柔軟な言葉を有し、無二の智慧を依り所とする者で、他でもなく本初仏そのものであると解釈する。

## 6. 『スヴァヤンブー・プラーナ』に見られる文殊と信仰

ネパールでは「*na mo va gī śva rā ye* (ナ, モ, ヴァ, ギー, スヴァ, ラ, エ)」の七つの文字を子どもに最初に教える。この七文字に Om (オン) と

いう字を加えると八文字からなる文殊に対する帰命句「Om namo Vagīśvarāye//[言葉に自在たるもの（文殊）に礼拝致します]」となる。これは、文殊が言葉（vāc-）または学問を象徴する尊格として広く知られている表れである。<sup>(33)</sup>

ネパール成立とされる『スヴァヤンブー・プラーナ』(Svayambhūpurāṇa)<sup>(34)</sup>には現在のネパールの首都があるカトマンズ盆地（スヴァヤンブー仏塔）の起源に関する物語（第三章）や「法界語自在マンドラ」および『ナーマサンギーティ』に関するエピソード（第六章）などが記されており、いずれもネパールにおける文殊信仰を示すものである。

『スヴァヤンブー・プラーナ』には文殊を「創造神」として扱う物語が収録されている。版によって内容に相違が見られるが、以下に核となる内容をまとめて紹介する。

現在のカトマンズ盆地はもともと湖であった。その湖の蓮華の上に「スヴァヤンブー仏塔」が浮かんでいた。中国五台山から文殊が参拝にやって来ると、カトマンズ盆地を囲む山を刀で切断して湖水を放出し、<sup>(35)</sup>人びとが住めるような場所にしたという。<sup>(36)</sup>

冒頭にも示したが、文殊が現在のカトマンズ盆地を造ったという伝説がネパールにある。<sup>(37)</sup>そのため、ネパール仏教において文殊は「創造神」として信仰されている。「スヴァヤンブー仏塔」は現在のネパールの首都の郊外の丘に位置し、「スヴァヤンブー・ナータ」(svayambhūnātha)<sup>(38)</sup>や「本初仏」(Ādibuddha)と呼ばれ、保護者、仏道に導く指導者としても広く信仰されている。

次に、『スヴァヤンブー・プラーナ』第六章に「スヴァヤンブー・プラーナ」および『ナーマサンギーティ』に関するエピソードが描かれているので、その概略を以下に示す。<sup>(39)</sup>

インドのヴィクラマシーラ僧院 (Vikramaśīla) の学僧であるダルマ・シュリーミトラ (Dharmaśrīmitra) は『ナーマサンギーティ』の十二文字 (a, ā, i, ī, u, ū, e, ai, o, au, am, aḥ) の秘義を教わるために五台山におられる文殊を訪ねる。その途中ネパール (カトマンズ盆地) にたどり着き、そこで文殊菩薩と会う。文殊菩薩はダルマ・シュリーミトラに「法界語自在マンダラ」の灌頂を授け、『ナーマサンギーティ』の十二文字の秘義も伝授した。ある日文殊菩薩が、ダルマ・シュリーミトラの様子を見るためにヴィクラマシーラ僧院へ行くと、文殊がみすばらしい老人の姿で現れたためにダルマ・シュリーミトラは信者達の前で師匠を無視してしまう。そのため彼は視力を失ってしまった。それ以降彼は「智慧 (jñāna) の目」で見ることになり、ジュニャーナ・シュリーミトラ (**Jñānaśrīmitra**) と呼ばれるようになった。

上記のエピソードに登場するヴィクラマシーラ僧院は十三世紀初頭にインドで仏教が滅亡するまで学問寺としての位置にあった仏教寺院である。また、文殊菩薩がダルマ・シュリーミトラを灌頂するために建立した「法界語自在マンダラ」は、現在のカトマンズのスヴァヤンブー仏塔であると伝えられている。「法界語自在マンダラ」は『ナーマサンギーティ』を典拠とするマンダラであり、法界語自在尊であり、文殊そのものである。これはネパールにおいて最も流布しているマンダラであり、その作例は現在でも数多く存在している。

以上のように、文殊は学問を象徴するものであり、保護者であり、マンダラの中尊であり、創造者であり、仏道へと導く指導者として信仰されている。『ナーマサンギーティ』はネパールでは常用經典として今日でも広く唱えられており、諸註釈に説かれる文殊の姿はネパールで文殊信仰とし

て広く浸透している。ネパールにおける文殊の信仰は『ナーマサンギーティ』および『スヴァヤンブー・プラーナ』が説く文殊を反映したものであると言えよう。

## 7. ま と め

文殊は、『法華経』のような初期の大乗仏典では眷属の一員とされるが、『仏説阿闍世王経』等後の大乗仏典においてはすでに仏果を獲得し仏・菩薩を生み出すものとされるまでに至る。同様に、仏教タントラにおいても文殊は、最初は眷属の一員でありながらも、次第に上首の菩薩となり、最終的に「本初仏」として現れるようになる。すなわち、文殊菩薩は智慧を象徴し悟りに導く尊格というだけでなくあらゆる仏菩薩の根源としても解釈されているのである。このように、文殊は仏典の発展に従ってその地位が向上する。ゆえに諸經典や時代によって異なる文殊の位置づけを分析することによって仏教思想の展開を知ることができることが明らかになった。

その文殊を種々の名号をもって称讃する仏教タントラが『ナーマサンギーティ』であり、これには複数の註釈書が存在する。本稿では、Mañjuśrimitra に始まる八人の註釈書を中心に、『ナーマサンギーティ』の解題と共に文殊そのものの解釈を見てきたが、その要点を以下でまとめる。

まず、『ナーマサンギーティ』は文殊たる文殊智慧薩埵の特質を示す種々の名号を正しく称讃するタントラであるが、その名号はただの名号ではなく、Vilāsavajra が説くようにタントラ・教説・経量部・アビダルマ・律など仏教に関する多くの概念が含まれ、諸功德が具わったものであるという。それゆえに文殊の諸名号を正しく唱えるだけで、無病、息災など種々の現世利益から無上現等覚の獲得につながると『ナーマサンギーテ

ィ』に説かれている。タントラ文献でありながら、そのような經典読誦の功德が説かれていることが、本經の信仰が民衆に浸透した要因の一つであると考えられる。

次に、文殊の解釈に関してであるが、『ナーマサンギーティ』の諸註釈書では、その文殊は大乗の菩薩と異なる性質を有することが明記されている。その一方でこれまで述べてきたように、Vilāsavajraの註釈では、文殊とは一般的に知られている大乗仏教の菩薩のように悟りに向けて十段階の境地を進んでいる者ではなく、般若破羅蜜多そのものであるという。Rong-zom-pa や Raviśrījñāna も Vilāsavajra と同様に無二の智慧を本性とするのが文殊であると説く。さらに、三者とも文殊はすでに仏果を得た者であり、本初仏そのものであることを強調している。

さらに、『チベット大蔵經』（蔵内）に収録されている『ナーマサンギーティ』には「著者不明の註釈書」が存在し、それは11世紀に活躍した Rong-zom-pa の『ロンソンパ全集』に収録されているものと同じ内容である。よって、「著者不明の註釈書」(Toh 2091; Ota 3364) は Rong-zom-pa の著作であることが明らかである。その Rong-zom-pa の文殊の註釈の内容は Smṛtijñānakīrti のものと共通している。それらによれば、文殊は声聞の教義においては、バラモン部族の童子の姿の凡夫であり、大乗の教義においては十地の主としての大乗の菩薩（智慧を象徴する者）であるという。また、タントラの教義においては、世尊毘盧遮那の心から顕現する十六大菩薩の中の金剛利となり、最終的には本初仏（法身、一切仏菩薩の根源）として登場する。チベットにおいては、Rong-zom-pa はインドからやってきた Smṛtijñānakīrti の後継者とされているから、その註釈の仕方には Smṛtijñānakīrti の影響があるのであろう。さらに、Smṛtijñānakīrti は、①本性因・②修習道・③究竟の結果と三種(因・道・果)の文殊を説き、それ

— 62 — 文殊菩薩の信仰をめぐって (スダン・シャキヤ)



ぞれ①欲界，②色界，③無色界，の三界に配置して説示している。そして Smṛtijñānakīrti が説く三種の文殊を五種に展開したのが Vimalamitra の註釈である。

すでに述べたように，文殊菩薩は大乗仏典や仏教タントラの発展に従ってその位が向上していく。それと類似した形で，上述した『ナーマサンギーティ』の諸註釈にも，仏教の教義の進化（声聞乗→大乘→仏教タントラ）と共に文殊の解釈（凡夫→十地の主としての菩薩→本初仏）にも変化が認められる。すなわち，凡夫としての文殊は，大乘の教義の興起と共に菩薩として扱われようになる。さらに仏教タントラの教義の発展により，同じ菩薩でありながらも不二の智慧を本性とするすでに仏果を得ている者となり，最終的には無始無終の仏または本初仏という究極の地位を得ることに至る。このように文殊の解釈は仏教の教義と共に変化を遂げている事が明らかである。中でも，『ナーマサンギーティ』に登場する文殊はすでに仏果を獲得した者であり，一切仏・菩薩を生み出す根源としての本初仏であり，尊格として頂点を飾る。

ネパールにおいても文殊菩薩は智慧・学問を象徴するものとして信仰されているが，同時に，『スヴァヤンブー・プラーナ』が説くように保護者であり，マンダラの中尊であり，創造者であり，本初仏として信仰されている。これは仏典の発展と教義の進化による文殊の姿・特質の変化の過程におけるそれぞれの文殊が信仰の対象としてネパールにとどめられているのだと言えよう。

### 主な参考文献

- 『ナーマサンギーティ』の註釈  
(I) 瑜伽タントラ系の註釈

- Mañjuśrimitra 著 *Nāmasaṃgītvṛtti* Toh 2532; Ota 3355; 『中大』  
Vol. 32, pp. 3-70 [*Vṛtti*]
- Vilāsavajra 著 *Nāmamantrārthāvalokinī* Toh 2533; Ota 3356; 『中大』  
Vol. 32, pp. 71-306 [*NMAA*]
- Mañjuśrikīrti 著 *Āryamañśrīnāmasaṃgītiṭīkā* Toh 2534; Ota 3357  
『中大』 Vol. 32, pp. 307-811 [*Ṭīkā*]
- Smṛtijñānakīrtikīrti 著 *Mañjuśrīnāmasaṃgītilakṣabhāsyā* Toh 2538;  
Ota 3361, 『中大』 Vol. 32, pp. 990-1121 [*Bhāsyā*]
- (Ⅱ) 無上瑜伽タントラ系の註釈
- 著者不明 (\*Rong-zom-pa 著) *mTshan yang dag par brjod pa'i 'grel pa  
tshul gsum gsal bar byed pa'i sgron ma zhes bya ba* Toh 2091; Ota  
3364 『中大』 Vol. 24, pp. 1463-1511 [*Annonny*]
- Vimalamitra 著 *Nāmasaṃgītvṛttināmārthaprakāśakaraṇādīpa-nāma*  
Toh 2092; Ota 2941; 『中大』 Vol. 25, pp. 3-99 [*Dīpa*]
- Dombiheruka 著 *Nāmasaṃgītvṛtti* Toh 2542; Ota 3365 『中大』  
Vol. 32, pp. 1450-1547 [*D-vṛtti*]
- (Ⅲ) *Kālacakratantra* 階梯からの註釈
- Raviśrījñāna 著 *Amṛtakaṇīkā-ṭīppaṇī* Toh 1395; Ota 2111; 『中大』  
Vol. 8, pp. 103-260 [*Ṭīppaṇī*]
- Narendrakīrti 著 *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītvākyāna* Toh 1397;  
Ota 2113; 『中大』 Vol. 8, pp. 333-490 [*Vākyā*]
- ※『中華大藏經丹珠爾』, 中国藏学出版社。 [『中大』]
- Sarvatathāgatattvasaṃgraha* 『真実撰経』 堀内寛仁 『初会金剛頂経の研究  
梵文校訂篇(上)(下)』, 密教文化研究所, 1983・1974年〈‘TSS’〉  
*Nāmasaṃgīti* Davidson, Ronald M, ‘The Litany of Names Mañjuśrī’  
Tantric and Taoist Studies Vol. 1, Bruxelles, 1981, pp. 1-69 (掲番号  
はこれに従い, [NS-] と表記する)
- Almogi, Orna *The Life and Works of Rong-zom Paṇḍita*, Master  
thesis, University of Hamburg, 1997
- *Rong-zom-pa’s Discourses on Buddhism*, IIBS, Tokyo, 2009
- Dudjom Rinpoche, Jikdrel Yeshe Dorje *The Nyingma School of*

- Tibetan Buddhism* Wisdom Publications, Buston, 1991 [Nyingma 1991]
- Lal, Banarasi *Āryamañjuśrīnāmasaṃgīti with Amṛtakaṇikāṭṭippanī Bhikṣu Raviśrījñāna and Amṛtakaṇikodyotanibanbdha of Vibhūti-candra*, CIHTS, Varanasi, 1994
- Mallmann, Marie-Thérèse de *Etude Iconographique sur Mañjuśrī*, Ecole Française d'Extrême-Orient, Paris, 1964
- Roerich George N. *The Blue Annals*, Motilal Banarsidass, 1976
- Rong-zom-pa 著 *Rong zom chos bzang gi gsung 'bum* 四川民族出版社, 四川省, 1999, pp.255-300
- Shastri, Haraprasad (ed.) *The Vṛhat Svayanbhū Pūrāṇa* Bibliotheca Indica Vol.133, Calcutta, 1894
- Tribe, Anthony *The Names of Wisdom. A Critical Edition and Annotated Translation of Chapter 1-5 of Vilāsavajra's commentary on the Nāmasaṃgīti, with Introduction and Textual Notes*, Ph. D Thesis, Oxford University, 1994
- 赤沼智善 「文殊系経典」『赤沼智善著作選集 第三卷復刻文献一覧 仏教経典史論』法蔵館, 1998年, pp.248-263
- 氏家昭夫 「般若と文殊」『密教文化』第115号, 1976年, pp.12-24
- 桜井宗信 「*Nāmamantrārthāvalokinī* を中心とした文殊具密流の考察 (1)」『密教学研究』19号, 1987年, pp.87-109
- 「*Nāmamantrārthāvalokinī* の原典研究 (1)」, 『文化』51 (3.4)号, 1988年, pp.1-32
- 「『ナーマサンギーティ』読経から瞑想へ」『インド後期密教上』春秋社, 2004年, pp.115-130
- 菅原泰典 『経集部小経解題』2000年 (私家版)
- スダン・シャキヤ 「Mañjuśrīkīrti 釈を中心とする *Nāmasaṃgīti* の一考察」『仏教学』, 2004年, pp.77-109
- 「スヴァヤンブー仏塔と『ナーマサンギーティ』をめぐる」『現代密教』第19号, 2008a年, pp.171-180
- 「『ナーマサンギーティ』と「法界語時マンダラ」に

- ついて」『密教学研究』第40号，2008b年，pp.60-76
- 「仏教文献に見られる文殊師利の解釈の展開について」『密教学』第45巻，2009年，pp.87-111
- “The Interpretation of Ādibuddha: as described in the *Nāmasaṃgīti* commentaries” 『印度學佛教學研究』第58巻第3号，2010a年，pp.144-150
- 「ネパールにおける弁天と文殊の信仰」『サラスヴァティー』創刊号，2010b年，pp.99-113
- 高橋尚夫 「『文殊讚佛法身礼』の方円図」『佐藤良純教授古稀記念論文集——インド文化と仏教思想の基調と展開』第1巻，山喜房，2003年，pp.47-63
- 「梵文『文殊讚佛法身礼』について」『北條賢三博士古稀記念論文集——インド学諸思想とその周辺』，山喜房，2004年，pp.337-360
- 梅尾祥雲 『後期密教の研究（下）梅尾祥雲全集（別巻V）』臨川書店，1989年
- 野口佳也 「初期密教経典としての『薬師経』」『密教学研究』第44号，2012年，pp.39-58
- 羽田野伯猷 『羽田野伯猷チベット・インド学集成』第一・三巻，法蔵館，1987・1988年
- 梅尾祥雲 『理趣経』密教文化研究所，1970年
- 平川彰 「大乘仏教の興起と文殊菩薩」『初期大乘と法華思想 平川彰著作集 第六巻』春秋社，1989年，pp.35-69
- 大正大学総合佛教研究所 梵号仏典研究会 『梵蔵漢対照『維摩経』『智光明莊嚴経』』大正大学出版，2004年
- 頼富本宏 「文献資料に見る文殊菩薩の図像表現」『雲井昭善博士古稀記念・仏教と異宗教』，1985年，pp.321-338
- 「インド現存の文殊菩薩」『成田山仏教研究所紀要』第11号，1988，pp.683-716

## 註

- (1) [スダン 2010b] を参照。

- (2) 一方、後述するように『ナーマサンギーティ』の諸註釈者は文殊を声聞教義に基づいて凡夫として解釈することに注目したい。
- (3) [スダン 2009: 88-89, 102-103] を参照。
- (4) 『ナーマサンギーティ』における「本初仏」に関しては [スダン 2010a] を参照。
- (5) [スダン 2009: 89-103] を参照。
- (6) [桜井 2004: 117] および [スダン 2004: 77] を参照。
- (7) 称讃による功德について [Davidson 1981: 39-44, 61-68], [スダン 2004: 95-97] および [スダン 2010: 101-102] を参照。
- (8) 『ナーマサンギーティ』の詳細な内容は [Davidson 1981: 39-44, 61-68], [桜井 2004] を参照。
- (9) 羽田野博士によれば *Nāmasaṃgīti* には三つの流儀が存在し、それは、*Mañjuśrimitra* の「虚空無垢流」、*Vilāsavajra* の「具秘密流」、*Mañjuśrikīrti* の「法界語自在流」である。[[羽田野著作集 第三巻]: 11-12], [桜井 1987: 87, 註4, 6] を参照。
- (10) [*Vṛtti* p. 8, l. 9-p. 9, l. 9]。
- (11) *NMAA* にはサンスクリット原典も現存し、その一部の校訂テキストも発表されている。[Tribe 1994], [桜井 1998] を参照。
- (12) [Tribe 1994: 214], [*NMAA* p. 75, ll. 4-19]。  
 abhidhānaṃ nāmasaṃgītir iti gānaṃ gītiḥ samyaggītiḥ saṃgītir  
 nāmnāṃ saṃgītir nāmasaṃgītir iti//nāmāni yogakriyācaryātantrapr-  
 avacanasūtrāntābhidharmavinayalaukikalokottarāṇi sarvasthāvara-  
 jaṅgamāni ca/teṣāṃ nāmnāṃ saṃgītir iti/
- (13) [*Ṭīkā* 309, 18-21]。
- (14) [*Ṭīkā* 350, 12-15]。
- (15) 釈尊滅後、弟子たちがその教えを集めて整理するために結集したということがよく知られるが、その結集を「サンギーティ」(saṃgīti) と呼ぶことも注目に値する。
- (16) [*Vṛtti* p. 8, ll. 9-11]。
- (17) [Tribe 1994: 84-85, 226] 及び [*NMAA* p. 84, ll. 1-12] を参照。  
 pañcañānātmako bhagavān mañjuśrījñānasattvaḥ/mañjuḥ komalā

śrīs yasyāsau mañjuśrīḥ/jñānasattva iti/sarvatahāgatahṛdayavihāri-  
tvāt/mañjuśrīs cāsau jñānasattvaś ceti mañjuśrījñānasattvaḥ/  
nāyaṃ daśabhūmīśvaro bodhisattvaḥ kiṃ tarhy advayajñānaṃ  
prajñāpāramitā saiva mañjuśrījñānasattvaḥ//

(18) 仏教において世尊 (bhagavat-) は四魔 (煩惱・五蘊・死・天) を調伏し、あらゆる功德を有するものと定義され、Smṛtijñānakīrti は文殊を世尊として解釈している事が明らかである。

(19) [Bhāṣya p. 990, ll. 3-8]

(20) 『初会金剛頂経』所説の金剛界マンダラの西に位置する阿弥陀如来を部族主とする蓮華部族 (padmakula) があり、阿弥陀如来を囲む第 2 番目金剛利が文殊の同体として登場する。[スタン 2009 : 91-92]

(21) [Bhāṣya pp. 999, l. 5-1000, l. 1]。

(22) [Annonny p. 1463, ll. 4-6], [Rong zom-pa 1999: 255]。

*de la 'phags pa 'jam dpa' ni gnyis su me pa'i ye shes te/ de ni dus gsum  
gyi sang rgyas thams cad kyi ye shes kyi dbag nyid/ byang chub kyi  
sems kyi ngo bo chos thams cad kyi chos nyid dang tha mi dad pa yin  
te/*

(23) Rong zom pa では、菩薩金剛 (\*bodhisattvavajra/tib. *Byang chub sems dpa' rdo rje*) とあるが、「著者不明の註釈書」では菩薩心金剛 (bodhicittavajra/tib. *Byang sems rdo rje*) となっており、後者に従う。菩提心金剛 (bodhicittavajra) は Vilāsavajra 所説の『ナーマサンギーティ』の註釈 NMAA に説かれている第六部族のことであり、文殊智慧薩埵のことであり、本初仏そのものである [桜井 1987 : 88]。

(24) [Annonny pp. 1465, l. 12-1466, l. 10], [Rong zom-pa 1999: 258-259]。

*nyon thos kyi tshul las ni 'phags pa 'jam pal zhes bya ba byang chub  
sems dpa'i rgyud du gtogs pa/ da dung 'phags pa'i lam ma thob pa so  
so'i skye bor 'dod do// pha rol tu phyin pa'i tshul mthun [mong du  
grags pa las ni byang chub sems dpa' sa bcu'i dbang phyug tu 'dod  
do//] 'dzam bu'i gling na yang bcom ldan 'das shākya thub pa'i 'khor  
du gyur pa yin no// 'og min na yang bcom ldan 'das rnam par snang  
mdzad kyi nye ba'i sras su gyur pa yin no zhe'o// mdo ste zab mo'i*

*tshul las ni/ sngon gyi dus su sang rgyas pa ste/ byang chub sems dpa'i  
tshul du bzhugs pa'o zhe'o// gsang sngags kyi tshul [las] kha cig las  
rigs kyi gtso bo de bzhin gshigs pa'i gtsug tor las sprul pa'i bdag nyid  
byang chub sems dpa'i tshul du bzhugs pa'o zhes 'dod do// rnal 'byor  
gyi tshul kha cig las ni bcom ldan 'das rnam par snang mdzad kyi  
thugs las sprul pa'i ye shes kyi sems dpa' chen po bjug drug las rdo rje  
rnon po ste 'jam dpal rdo rje zhes 'dod do// rnal 'byor chen po'i tsul  
kha cig las ni/ 'jam dpal ye shes sems dpa' zhes kyang bya/\_byang  
sems rdo rje zhes kyang bya/ de bzhin du rdo rje sems dpa' dang/ kun  
tu bzang po dang/ bde ba chen po la sogs pa sangs rgyas thams cad kyi  
gtso bo dkyil 'khor thams cad kyi mnga' bdag nyid du yang bstan to//  
'jam dpal gyi sgyu 'phrul dra ba las ni de bzhin gshegs pa thams cad  
kyi thugs ka na 'jam pa'i rdo rje bzhugs te/ de yang dang po'i sang  
rgyas kyi tshul dang/ ye shes sems dpa'i tshul gyis bzhugs so zhes 'dod  
do// 'di dag ni 'phag pa 'jam dpal gyi bdag nyid bstan pa'o//*

下線の部分は後述する Rong-zom-pa の著書 Rong zom-pa 1999: 258 (16-17) に付け加えている部分である。

- (25) [Almogi 2009: 127 (fn307)] において、同文を引用し、Rong-zom-pa 作として文殊の種々の顕現を紹介しているが、そこには「著者不明の註釈書」との異説については言及がみられない。
- (26) 幻化網タントラ (*Māyājālatantra*)』と題するタントラは「チベット大蔵経」(Toh 466; Ota 102) では存在するけれども、*Nāmasaṃgīti* がいう一万六千頌が含まれている『幻化網大瑜伽タントラ』の「広本」と言うべき經典の實在の可能性は低いとされるものの皆無ではない。
- (27) Rong-zom-pa の生涯について [Nyingma 1991: 703-709], [Roerich 1976: 160-167] を参照。また、Rong-zom-pa の生涯や著作に関する研究は [Almogi 1997] および [Almogi 2009] が詳しい。
- (28) [Rong zom-pa 1999: 255-300]。
- (29) [Nyingma 1991: 703]。
- (30) [*Dīpa* p. 5, ll. 6-9]。
- (31) [*D-vṛtti*, p. 1450, ll. 15-21]。

- (32) [*Amṛtakaṇikā*: 8]。  
 mañjuśrījñānasattveti dharmasaṃketena mañjuśabdena  
 vajraśikhare pratphulla varakamalaṃ tadevādvayajñānā-  
 śrayatvāt śris tadutpannam advayajñānaṃ mañjuśrījñānasattvasya/  
 (33) [スダン 2010b : 109-110]。  
 (34) 『スヴァヤンブー・プラーナ』は韻文から構成されるネパール成立の物語集である。様々な編纂を重ねて多種の類本が存在し、その成立年代について様々な説がある。写本として最も古いのは十四世紀のものである。さらに、Situ Panchen (1699-1774) によるチベット語訳も現存する。この文献には主に短（八章）・中（十章）・長（十二章）と、その長さによって三種のテキストが現存する。その中で、ネパールで最もよく知られているものは十章からなる版である。[スダン 2008] を参照。  
 (35) tasmin cinapradeśe ca madyasthāne viśeṣatataḥ/pañcaśirsanāma-  
yuktaṃ asti ca eka parvataṃ/// (*VSP* 149) cinapradeśa- は中国を、  
 pañcaśirṣa は五台山を示す言葉である。  
 (36) candrahasen khaḍgeṇa nīṣitenācchiddvibhūḥ/parvataṃ jalasaṃgha-  
taṃ bāhayāmāma dhīrdhiḥ/// (*VSP* 167)  
 (37) ヒンドゥー教においても同様の伝説が伝わっているが、その主役は文殊ではなくビシュヌ神とされる。  
 (38) 「ナータ」(nātha) という言葉には保護者は、救済者という意味が含まれており、ヒンドゥー教の神々に対して用いることも多い。  
 (39) [スダン 2008a : 175-177]。

#### 付記：

本稿は平成24年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）「課題番号24520056」による研究成果の一部である。